

だがしや楽校 だがしや倶楽部

活動のテーマ: 子供たちの交流拠点としてのだがしや楽校の設置事業

キーワード

だがしや 遊びと学びの場 交流

団体・活動概要

「だがしや楽校」とは、いつでも・どこでも・誰にでもできる学びの場を指す。学校とは異なるスタイルで学ぶ「もう一つの自由な学びの場」、「楽しい学びの場」という意味から楽校(がっこう)と名づけられた。かつて地域社会の中にあつた放課後の駄菓子屋(子供みせ)からアイデアを得て、実社会での「しつけ・創意・つきあい」を育む集いが、全国各地で各々創意工夫した形式で実施されている。縁日やお祭りのように手軽に「遊びと学びの屋台」を開く集いが中心となっている。

当団体設立のきっかけは、鶴岡市の書店主人が、「だがしや楽校」を商店街のイベントとしてできないか、発案者の松田道雄氏に尋ねたことによる。山形県内の大学の教員や個人事業者等を中心に、2004年に設立された。大学生を実働メンバーとして「だがしや楽校」の普及・啓発活動を展開している。

助成年度の活動概要

鶴岡市、山形市、遊佐町の三箇所を開催会場として選定し、各々の場所で定期的に「だがしや楽校」を開催した。地域の多様な人々に関わることで、子どもの情操教育、大人と子どもの交流、地域社会の再生・活性化に貢献した。

1. 鶴岡市の拠点と開催回数：
鶴岡市第五コミュニティセンター、16回
2. 山形市の拠点と開催回数：
山形市南公園、5回
3. 遊佐町の拠点と開催回数：
駅前の空き店舗を活用した駄菓子屋、10回

活動対象地域

山形県鶴岡市
面積：1,311km²
人口：142,000人



活動の特徴・ポイント

1. 多様な人の交流場所
2. どこでも容易に開催可能(ビールケースとベニヤ板を置くスペースを確保)
3. 開催者が目的に応じてプログラムを設定できる
4. 誰もが教える立場になりえる

だがしや楽校 だがしや倶楽部
代表者 部長 阿部 等
連絡担当者 阿部 等
住所 〒997-0028 山形県鶴岡市山王町8-21
TEL 0235-25-6320 FAX 0235-25-6320
e-mail abeq@triton.ocn.ne.jp
ホームページ http://www.dagashiya-gakko.com/

1. 活動の背景・目的

「だがしや楽校」は、お祭りやフリーマーケットのように屋台を並べる方式で「伝統遊び」や「工作遊び」、「実験遊び」等の楽しい学びの場を子どもたちに提供する活動です。誰もができる遊びを通して、世代交流、創意工夫、社会のマナーを身につける試みとして1997年から始まりました。山形県の中学校

教師だった松田道雄氏（現東北芸術工科大学子ども芸術教育研究センター研究員）が発案・命名した取り組みです。かつての放課後の駄菓子屋を取り巻く遊び場の研究で、明らかになった教育的意義を現代に活かすために、実験的に行われるようになりました。松田氏はまず、子どもたちが放課後どこに集まっているのかを調べるうちに、現代にも駄菓子屋が存在することを知りました。そして、店主、店に来た子どもから聞き取り調査を行いました。その結果、駄菓子屋に学校とは別の教育的価値を見出しました。それは、自由で楽しい交流の場、子どもの新たな可能性や能力に気づくことができる場として捉えられました。学校教育、駄菓子屋的教育双方が人間の成長のためには大切だと実感して、実験活動に至りました。

「だがしや楽校」に注目が集まり始めたのは、2000年頃に山形市の南公園で東北芸術工科大学の学生による実験活動が、テレビで放映されたのがきっかけです。その後各地から発案者の松田氏への問い合わせが殺到し、その問い合わせをした人達が松田氏の呼びかけで一同に会したことから、組織化のための

準備会が結成されました。しかし資金的な問題と、組織化すると代表や規約が発生するので「だがしや楽校」の理念に反するのではないかという危惧から、意見集約するまで1年ほどかかりました。その後紆余曲折を経て、2004年に当団体は山形県内の教育関係者、個人事業者を中心に設立されました。

組織化した後はチラシづくりや寄付集めを中心に活動を始めましたが、資金・人材ともに脆弱なため、た

くさんの「だがしや楽校」の開催依頼をお断りする状況でした。そのような折、2004年度の東北公益文科大学のNPO支援活動助成事業に当団体が採択され、大学生と共に実践活動を行うようになりました。当大学には「だがしやクラブ」というサークルが創設され、現在も「だがしや楽校」の開催のみならず、普及・指導においても大きな力となっています。また、東北芸術工科大学でもゼミ生が中心となって活動に関わってくれています。芸大ならではのアイデアと芸術性に富んだ

発想が、団体にとってなくてはならない存在です。この活動の良さは、言葉で説明するよりも実際に見せることで納得して

もらえることです。当団体は、「だがしや楽校」を山



切り紙の様子



鶴岡市での「だがしや楽校」開催チラシ

形県内各地に広めることを目的として、各地域の小学校やコミュニティセンターなどへの出前活動を精力的に行っています。

2. これまでの実績

2004年

「だがしやフェスティバル開催(於:山形市中央公民館)県内のネットワーク化したメンバーで実

2006年

「だがしや楽校全国寄り合い2006」開催(於:東北芸術工科大学こども芸術大学)

全国で様々な形式で開催されるようになった「だがしや楽校」関係者が一同に会し、親睦を深めたそのほか、山形市や鶴岡市で開催されるイベントや商店街の祭りに多数回出店

3. 助成年度の活動内容

単発イベントではなく定期的に開催している各地のキーパーソンと話し合いをして、県内3ヶ所で「だがしや楽校」を開催することとしました。

鶴岡市での活動(鶴岡市第五コミュニティセンターを拠点として)

第五学区コミュニティセンター長および第五学区町内会連合会に「だがしや楽校」を定期的で開催したい旨の申し入れを行う。

鶴岡市第五小学校校長および教頭に「だがしや楽校」を第五学区コミュニティセンターで開催することを通知。こどもたちへチラシ・ポスターなどの情報提供をしていただけのこととなった。

第五学区15町内会長への「だがしや楽校」説明会を開催(6名参加)

第五学区全戸にチラシ配布

東北公益文科大学の学生グループ18名を中心に6月から毎週土曜日、計16回開催した。毎回20名くらいの子どもが参加した。

その他地域の祭りやイベントに出店



大学生が町内会長に「だがしや楽校」を説明している様子

子どもたちの反応で面白かった点

丸太を使ったコースター作りで、ほとんどの子どもはコースターではなく、表札、名札等を作り、丸太のオブジェを作った子どももいた。指導にあっていた大学生が、子どもたちの発想力、実行力に触発された。

あまり子どもに人気のないプログラムは、郷土の踊りや民話語りのお話会だった。部屋の中に入りなさいと誘っても、子どもたちはなかなか座ってくれず、遠くからのぞく程度だった。また、指導者自らが手を動かしていない屋台にも子どもたちは近寄ってこなかった。

毎回、大学生と子どもたちに受ける屋台を考えたが、最後は材料をいろいろ並べておくと、それなりに子どもたちが創意工夫して遊んでくれた。

大学生の中には、このような工作遊びをしたことがなくて、子どもたちにどのように対応したらいいかわからず困っている学生もいた。すると、逆に子どもたちが寄ってきて彼らと遊んでくれることがあり、大人と子どものつきあいや、子どもの視点で学びと遊びについて考えさせられることが多々あった。

山形市での活動(山形市南公園を拠点として)

山形市南公園は「だがしや楽校」発祥の地で、「はじめや」という駄菓子屋があることから開催するには絶好の立地条件であった。5月から第一、第三土曜日の計5回開催した。東北芸術工科大学と女性ボランティア団体の「もてなし隊」の15名が先生となり、毎回50名くらいの子どもたちが参加した。

その他地域の祭りやイベントに出店

東北芸術工科大学キャンパス屋外空間にて、だがしや楽校における人間関係づくりの状況を考察するために、駄菓子屋屋台の大人版としての屋台喫茶(「青空喫茶店」)を毎週土曜日の午前中に開催した(担当:松田道雄氏)。この実践は、「だがし



「青空喫茶店」開催の様子

や楽校」の開催を誘発する大人の企画相談の集いの様相も呈しつつある。6月から9月にかけて計5回開催した。

遊佐町での活動（空き店舗を活用した駄菓子屋「ぼん」を拠点として）

この事業は、遊佐町の青年団が中心となって2006年8月より遊佐町の駅前の空き店舗を活用して実験的に駄菓子屋を開店した。開店にあたっては、「だがしや楽校」メンバーの提案で実現の運びとなった。10月から隔週の土曜日に開催し、計10回行った。毎回地域の子もたちが50名くらい参加した。

4. 活動の成果と課題

1) 地域内外への波及効果

ネーミングが良いからか、既に地域の人達に「だがしや楽校」の名称は浸透していました。しかし、どのような取り組みで、実際にどのようなことを行うのかは知らない人が大多数でしたので、多数回開催した鶴岡市第五学区に関しては、相当認知されました。「だがしや楽校」発祥の地、山形市の南公園も同様に認知度が高まっています。遊佐町の駄菓子屋「ぼん」は、実際に駄菓子を売りながら拠点として活動していますが、採算ベースには至っていません。しかし、こどもたちの集う地域拠点として認知されるようになりました。

地域や学校などから「だがしや楽校」の開催指導依頼や、コミュニティセンターから学生グループへ開催依頼が増えてきたことは、今回の活動による変化だと思います。

2) 組織における成果

「だがしや楽校」への協力者の増大、特に大学生の



空き店舗を活用した駄菓子屋「ぼん」

スタッフが格段に増えました。また、県内の「だがしや楽校」メンバー同士の協力体制も確立しました。その上県内各地のコーディネーターが実力をつけて、各地で独立して開催できる状況となってきました。

3) 課題と解決策

課題として下記のような事項が上がりました。

活動をする前に聞こえてきたこと（チラシを全戸配布してから）

「だがしや楽校」はだがしを売るイベントだ。

「だがしや楽校」を隠れ蓑に商売をしているのではないか。

「だがしや楽校」は学術的で難しく、町内会で取り組めない。

「だがしや楽校」は誰でも出来ると言っても、マニュアルもなく何も出来ない。だから特殊な人たちしか出来ない。

「だがしや楽校」は子どものみまつぶした。

このような声から、「だがしや楽校」に対して町内会の役員会などでは距離を置いて見るような雰囲気がありました。

地域の人たちを巻き込んでの活動の難しさを感じました。

活動を始めてから聞こえてきたこと（だがしや楽校を見に来た人より）

「だがしや楽校」は簡単にできると言いながら準備が大変そう。

自分の特技ということで、行って見たが子供たちは無関心。

なんでもいいから先生になってといわれても…。具体的に何をしたいのか、誰に聞けばいいのか



木工教室の様子

わからない。

責任者は一体だれ。(大学生だけで開催したとき)
「だがしや楽校」の協力者を募り、来てくれた人や子供についてきた親の声から。

一緒になって活動してくれる地域の方は少数でした。活動を続けていくにつれ来てくれる地域の人たちが増えてきました。

小学校PTAの方たちより(教育的な意味合いより)

この取り組みを見ると、統率がとれていない。
自由にやっていいと言われると、何も出来ない。
なにか指示してほしい。
こういった遊びをやって、その後の展望が見えない。
楽しいのはわかるが、子供の教育に資するのか疑問。

教育的見地から、
「だがしや楽校」を見る方たちは、上記のような印象をうけるようでした。教育的に資するプログラム化・マニュアル化の必要性を感じました。

解決策

活動を続けながら、特に町内会の見えない壁みたいなものが立ちふさがっていることを非常に強く感じました。多くの住民の理解を得るためには、まずは顔の見えるつきあいを大切にして、地域に根付くためのプロセスを丁寧に行っていきたいと思っています。また、あまり性急に活動を進めるのではなく、たとえ小さくても、出来るところからこつこつと続けることの重要性を感じました。



マイバックづくりでお父さんが心配そうな様子

5. 今後の展開

県内各地のコーディネーターが小さい規模ながら活動を続けてきましたが、いろいろな反省点を踏まえ、地域の方たちより愛され、地域の方たち自身もやってみたいと思うような「だがしや楽校」となる活動を続けていきたいと思っています。一つの例として、山形市桜田地区のPTAの役員の方が、私たちの活動に呼応して12月より「だがしや楽校」を地域で始めるようになり、はじめて「だがしや楽校」を開催したところ、ひとりの子どもも来てくれなかったということでした。しかし、全然めげることなく次の月もやってみようとしています。

今後は、地域に根ざす「だがしや楽校」を目指し、誰でも簡単に出来るプログラムづくりと、「だがしや楽校」のよろず相談の受け付けや支援等を行える事務局体制を作っていきたいと思います。



鶴岡市体育館で開催された「だがしや楽校」の様子

また、県内のキーパーソンを増やしていく活動を進めてネットワーク網を広めていきたいと思っています。現在のところ、インターネット上での情報提供と定期的な寄り合いを行う予定です。資金的には脆弱ですが人の繋がりは強まっていますので、マンパワーをフルに活用して活動を広げていきたいと思っています。



活動に参加してくれた大学生たち